

令和 5 年 5 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23179

研究課題名（和文）タイの「自主外交」の歴史的・文化的検討 「脅威」と「親戚」の間で苦悩する対中認識

研究課題名（英文）Reexamining Thai Diplomacy and Perception of China from Historical and Cultural Perspective

研究代表者

タンシンマンコン パッタジット（TANGSINMUNKONG, Pattajit）

早稲田大学・社会科学総合学院・講師（任期付）

研究者番号：10844136

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、1960年代から2010年代までの、歴代の指導者、軍部、メディア、知識人、財界人などの意見を通して、タイ社会における多様な中国認識を追跡することで、その変遷をもたらした要因と中国認識の特徴を明らかにし、対外政策の形成にどのように影響したのかを究明することである。最後の段階において、本研究は対中認識だけではなく、英仏、日本、米国という大国をも視野に入れ、時代を生きた人々の認識からボトムアップで外交史を描きなおすことにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第1に、本研究の最後の成果は「風になう竹の外交」という従来のタイの外交言説において主流であり続けてきた考え方を批判的に検討し、「小国意識」というレンズでタイ外交史を読み直すことで、新たな分析枠組みを提示することである。第2に、タイ人の外交に対する意識構造を分析し、伝統的なタイ外交史が無視してきたアクターの主体性に着目することから、東南アジア史、タイ史の深化を図り、歴史上の人物が果たした役割の再評価が可能になる。外交史で無視ないし悪魔化されてきた主体の対外認識の論理に光を当てることで、「想像の共同体」として捉えられがちな国民国家の「違ったあり方」やナショナリズムの重層性を提示している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to trace the diverse perceptions of China in Thai society from the 1960s to the 2010s through the opinions of political leaders, the military, the media, intellectuals, and the business sector. This study aims to identify the factors that led to these changes and the characteristics of these perceptions and to determine how they influenced foreign policy formation. This research will also determine how these perceptions of China have affected foreign policy formation. In the final stage, this study focused on perceptions of China and major powers like Great Britain, France, Japan, and the United States in different periods of time. The aim is to rewrite a bottom-up diplomatic history by spotlighting people who lived during a specific period.

研究分野：東南アジア研究、タイ研究、歴史

キーワード：タイ外交史 対外認識 歴史認識 竹の外交

1. 研究開始当初の背景

1960年代以降、タイ政府、軍部、メディア、知識人、財界人などがタイに有利な国際関係を創出するために、それぞれの立場から「大国」中国との距離を模索してきた。中国は「脅威」か「親戚」か、タイの中国認識と対中国外交は苦悩の連続であった。世界における中国の影響力が急速に増大している現在、その苦悩は一層深まっている。米中日などの「大国」との関係処理するなかで、タイは「自主外交」を模索してきた。中国との地理的、歴史的関係や大量の華僑の影響で、タイ中関係は特別な二国間関係にならざるを得なかった。このような二国関係のあり方を決定づけたのは、国際社会の変容やタイ国内情勢の変化のほか、歴史的、文化的ファクターも重要である。しかし、歴史と文化の視角からのタイの対外認識と政策に関する研究は極めて少なく、日本におけるタイ研究の盲点とも言える。本研究は1960年代から現在まで、「脅威」と「親戚」の間で揺れ動くタイの中国認識に注目し、対米認識と対日認識と比較しつつ、歴史と文化のファクターを重要な位置に据え、タイ的「自主外交」を明らかにしたい。

本研究の核心をなす学術的「問い」は、中国の大国化が「脅威」と「機会」という二つの対立する認識で捉えられているなか、タイが「自主外交」を成功させた歴史的、文化的要素はなにか、そして、その「自主外交」を支えた対外認識(中国認識)はどのようなものだったのだろうか。

東南アジアの国々の間では、影響力を増大してきた中国に注目し、中国を「脅威」として見なしている国が多い。その一方で、中国の経済大国化に対応し、中国と接近することによって成長の機会を掴もうという戦略を展開している国も存在する。インドシナ半島の中心に位置し、ASEANの重要な一員であるタイは、共産主義の脅威を強く意識した時代もあったが、中国と国交樹立以来、友好関係を模索してきた。しかし、中国は大量の華僑を抱えるタイにとって「脅威」なのか、それとも「親戚」なのか、この問いかけは常にタイ社会を悩ます問題であった。タイ人は東南アジアのなかでも中国と適切な距離を維持してきたと自負している。このような「自主外交」を支えたタイの歴史とタイ人の価値観はどのようなものだったのか。また、タイと中国との間に領土問題が存在しないことや、多くの華人がタイで生活していることが、両国関係のプラス要因である。しかし、1950年代に遡れば、共産主義の中国は「悪魔」のような存在であった。1960年代以降、中国イメージは転換し、中国認識も多様化していった。時代とともに変化してきた中国認識が「自主外交」の展開にどのような影響を与えてきたのか。

要するにタイの「自主外交」をもたらした歴史的文化的要素と、時代とともに変化した中国認識を明らかにすることが本研究の目的である。

2. 研究の目的

前述のように、本研究の目的は、タイが「自主外交」を成功させた歴史的、文化的要素と、その「自主外交」を支えた対外認識（中国認識）を明らかにすることである。

具体的な作業は、タイの歴史のなかで形成された人間、社会、国家間関係の特徴を「外交文化」として究明し、タイの「外交文化」が対中国関係における「自主外交」にどのように規定したのかを明らかにする。また、1960年代から2010年までの、歴代の指導者、軍部、メディア、知識人、財界人などの意見を通して、タイ社会における多様な中国認識を追跡し、その変遷をもたらした要因と中国認識の特徴を明らかにし、対外政策の形成にどのように影響したのかを究明する。

3．研究の方法

前述のように、本研究は近隣の大国・中国に対応するために展開した「自主外交」の成因とその特徴を明らかにすることである。そのために、歴史と宗教の角度からタイと中国の人間、社会、国家間関係に対する理解を分析し、タイと中国の「外交文化」に一定のイメージを提示する。1960～2010年代までのタイ社会における中国認識の変化過程、その変化の要因と特徴を明らかにすることが目的である。この3つの問いに基づき、「時代の視点」（時代の変遷ともなうタイの中国認識の推移）と、「比較の視点」（それぞれの時代に対応するタイの日本、アメリカ認識と、ASEANの一部の国の対中認識）を設定した。中国認識に関する検討の対象として、対外政策と密接に関係している①指導者、②政府関係者、そして世論に影響を及ぼす③メディア、④知識人とする。

研究手法は、公文書、政府機関の報道、新聞、雑誌、論文集などの文献資料のほか、世論調査とインタビューに基づいた分析も行いたい。

4．研究成果

本研究の目的は、1960年代から2010年代までの、歴代の指導者、軍部、メディア、知識人、財界人などの意見を通して、タイ社会における多様な中国認識を追跡することで、その変遷をもたらした要因と中国認識の特徴を明らかにし、対外政策の形成にどのように影響したのかを究明することである。筆者は修士論文と博士論文の成果を活かしつつ、外交における認識の役割を再検討し、過去4年間の研究成果を『タイ外交の論理 竹の外交を脱出して』（仮）という単著にまとめ、出版の準備を進めた。この単著は博士論文の一部を活用し、博士論文の構想から展開したものだが、その4割以上の内容は新たに執筆したものである。

最終的研究成果は、単に中国認識を語るだけではなく、従来タイの外交を語るときに暗黙知となっていた「風にしなう竹」という外交言説に反論しながら、タイの例外主義という前提から脱却し、新たな「小国意識」という比較可能な視点でタイ外交史を読み直すことを試みた。帝国主義時代に脅威として見なされた英仏、第二次世界大戦中に同盟を結んだ日本との関係を歴史背景として議論に組み込んだ。そして戦後、軍事同盟を結んだ米国、多額の経済援助を与えた日本、1980年代にタイ領を侵略したベトナムに対する外交と対外認識も視野に入れ、時代

を生きた人々の認識からボトムアップで外交史を描きなおすことにした。タイの外交と対外認識の変化と不変、意識構造のパターン、現在起きている現象と歴史から残った負の遺産との繋がりを分析することにより、本研究成果の学術的価値はさらに高まると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 タンシンマンコン・パッタジット	4. 巻 61(1)
2. 論文標題 「反日運動からジャパナイゼーションへ 1970-1990年代のタイにおける対日 認識転換の再検討 」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『東南アジア研究』	6. 最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Pattajit Tangsinmunkong.	4. 巻 1
2. 論文標題 Reincarnation of the "Devil": Changing Thai Perceptions of China from the 1960s to the 2010s	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The new perspectives on international studies in Asia- Pacific	6. 最初と最後の頁 71-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 タンシンマンコン・パッタジット	4. 巻 4
2. 論文標題 1980年代のタイにおける中国認識の転換 - カンボジア紛争とその影響 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 次世代論集	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 タンシンマンコン・パッタジット	4. 巻 58(1)
2. 論文標題 タノーム政権期におけるタイの対中認識と政策の変化 「敵対」と「和解」の論理を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『東南アジア研究』	6. 最初と最後の頁 N/A
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 タンシンマンコン・パッタジット	4. 巻 25
2. 論文標題 タイの2つの「10月事件」期における中国認識 右派と左派の綱引き	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ソシオサイエンス』	6. 最初と最後の頁 84-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 9件)

1. 発表者名 Pattajit Tangsinmunkong
2. 発表標題 “Orientalism from Within: Representation of Southeast Asia in History Textbooks of Japan, China, and Thailand”
3. 学会等名 Global Asian Studies Joint Workshop, IASA, UTokyo X CoHASS, NTU Singapore (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Pattajit TANGSINMUNKONG
2. 発表標題 “The Changing Thai Perceptions of Japan: from Animosity to Popularity”
3. 学会等名 FY2021 Waseda Social Innovation Online Symposium (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 タンシンマンコン・パッタジット
2. 発表標題 「小国のタイから見た中国 敬遠外交と両面外交の一考」
3. 学会等名 北東アジア学会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 タンシンマンコン・パッタジット
2. 発表標題 「米中和解に対するタイの対応」
3. 学会等名 歴史と和解学国際ワークショップ（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 タンシンマンコン・パッタジット
2. 発表標題 “ Why Do We Hate Each Other?: Understanding hatred through historical perception gaps between Japan and China. ”
3. 学会等名 東京大学東亜芸文書院（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 タンシンマンコン・パッタジット
2. 発表標題 戦後タイにおける日本認識の変遷 1980 年代を中心に
3. 学会等名 the 5th Asia Future Conference （第5回アジア未来会議）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 タンシンマンコン・パッタジット
2. 発表標題 福田ドクトリンとタイの知識人の反応
3. 学会等名 第四回東アジア日本研究者協議会国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 タンシンマンコン・パッタジット
2. 発表標題 タノーム政権期におけるタイ中の相互認識と政策 「敵対」と「和解」の論理
3. 学会等名 日本タイ学会2019年度研究大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Pattajit TANGSINMUNKONG
2. 発表標題 Understanding Sino-Thai Relations through Cultural Perspective: Guanxi and Uppatham System
3. 学会等名 2019東亜的跨域治理国際学術研討（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Pattajit TANGSINMUNKONG
2. 発表標題 Thai Perceptions of China: 1960-present
3. 学会等名 The 1st Peking University-Waseda Workshop “ Sino-Japanese Relations in a New Era ”
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 劉傑、タンシンマンコン・パッタジットほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 388
3. 書名 『和解のための新たな歴史学 方法と構想（和解学叢書5＝歴史家ネットワーク）』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------